■研究・十二月往来〔27〕

放下僧、古今あり

西野春雄

能の脚本が現在残された形に固定するまでには、かなり大きな改定がほどこされていることが多い。そうした事例のいくつかは『三道』『五音』『申楽談儀』などで知られる。たとえば、観阿弥作の〈自然居士〉には、表白文のあと長文の説法の場面があったし（以前、寿夫氏が試演された）、井阿弥の〈通盛〉は、具体的にはわからないが世阿弥が大幅に切除けているという。はなはだしい例は〈卒都婆小町〉で、古形は、シテ登場の段に、もう一段分シテ謡があり、シテの狂乱の段のあとに玉津島明神の使者として烏（アイの役）が出現する場面もあった。つまり原〈卒都婆小町〉は〈護法〉型の能であったらしい。

こうした改定作業の多くは、世阿弥またはその同時代以前の人の手によってなされているようである。しかし、同じことが、われわれの知り得ないところで行われていた可能性もあり、一曲一曲の脚本および演出の変遷には十分注意する必要がある。以上は常識的なことであるが、昨冬の調査旅行で、現行とは全く別種の終結形式を付載する〈放下僧〉の詞章に出逢い、いっそうその念を強くした。

それは、いままで報告されていない岩国徴古館所蔵・鈔写車屋謡本の一種で、綴帖装、茶色表紙の美濃本（二五四×一八七㎜）、五番綴、全十八冊。左上に長形題簽があり、右上・左上・中央・右下・左下の順に曲名を書く。見返しに収載曲目を列記し、曲ごとの内題もある。本文の書風は肉太で柔かみのあるものと、肉細でやや硬い感じのものの二種。片面六行。どの冊にも識語・年記・署名はないが、装訂・書風・節付その他から見て車屋本に相違なく、特に野上豊一郎氏旧蔵本や毛利家旧蔵本に近い。謡い方に関する注記があり、数曲ではあるが古い詞章や小謡も付記されている。詳細は別に発表するとして、今回はその付載された詞章について考えてみたい。

車屋本は、時々古い詞章を付記することがある。たとえば、日本古典全書『謡曲集下』の〈花形見〉の末尾に「又きり」として、現在も女御留（安閑留）の小書で残っている古

い詞章を載せている。こうした形がこの謡本にも数例見られるのである。即ち、〈花筐〉に「昔のきり」として女御留の文句を載せ、〈東岸居士〉に橋立の小書の詞章（シテの登場歌サシ・上ゲ哥）を付記する。また〈千手〉に「昔の上哥」として散佚曲（煙見千寿）の詞章が付載されていたのは驚きであった。

上行衛もしらぬ我心。〳〵、実も及ばぬ恋すとて、よそめにもはや白雪の、ふじの煙より、我名のたつぞ悲しき。実や長柄の橋柱、千たびも、夜をふるとても、誰に契りをかけてまし、あぢきなの浮世や、あらめぢきなの憂世や。

この謡い物については片桐登氏「忍ぶれどの謡について」（『観世』昭38・2）の論考があり、現行曲〈千手〉の後日譚らしい幽霊能形式の〈煙見千寿〉を想定しておられる。上杉本『乱曲集』にのみ伝存していた〈煙見千寿〉の一節が現行〈千手〉の末尾に付記されている事実は、いろいろの解釈が可能であり、〈千手〉の成立をめぐって種々の問題を提起する。

さて本題の〈放下僧〉だが、この曲は敵討ちを筋立に借りた芸尽しの能である。物々しい出立と由緒付け・禅問答・曲舞・小歌・羯鼓と芸能を連らねる趣向は〈花月〉と同じだ。結びは、〔掛ケ合〕（いつまでかくて…）〔哥〕（この年月の…）〔キリ〕（かくて兄弟念力の…）と本望を遂げたことを簡単に叙すのみ。ところがこの本は、末に「昔のきり」として次のような詞章を付記している（いま私に濁点を加え、小段に分け囃子事も添えてみた。）

〔上ゲ哥〕上かくて兄弟ねんりきの、親のかたきを打ければ、我等兄弟うたんとて、みなことごとく打出る。かねてごしたる事なれば、放下の姿出立を、皆ぬぎすててよせきたる、てきを今やと待ゐたり、〳〵。

〔一声〕

〔一セイ〕ほしづきよ、かまくら山をうち出て、せとの三島に急ぐなり。

〔中ノリ地〕上いでものみせんといふままに〳〵、我まつさきにと兄弟の、前後をあらそふ其けしき、いかなるてんまきじんも、面をむくべきやうぞなき。

〔ノリ地〕上しげただときまさ、是をみて。（しげただ…）〳〵、ものものしやな、あの兄弟にわたりあひ、ししふうじん、こらんにう、ひてうのかけりの、手をくだきつつ、せめたたかへば、がまんもしだひに、つきはてぬれば、しやとうにむかつて、たのみをかけし、三島の明神、力をあはせて、たび給へ。

〔早笛〕（または**出端**）

〔ノリ地〕上明神姿を、あらはし給ひ、（明神…）〳〵、

みことのりして、のたまひけるは、此度兄弟、かたきをうつも、わがなすゆへなれば、なを兄弟に、力をあはせんと、立出給へば、下しげただときまさ、かうべを地につけ、明神を礼し、上是迄なりとて、兄弟をいだきとり、本国にかへしけり、実有がたき、神力に下ひかれて、天下に名をこそ、あげにけれ

なんと敵討ちのあと入り乱れての斬合が続き、三島の明神まで出現するらしい。詞章は〈熊坂〉（獅子奮迅虎乱入…）や廃曲〈守屋〉（情識も尽きはて我慢も倒れて…）などと類似の文句もあり、登場人物や場所からは廃曲〈秩父〉とも近く構成は〈烏帽子折〉の後半に似る。もしこれが古形であったとすると、あまりに長くなり別の斬合物の結末（広義のキリ）を誤って付記したかとも疑われるが、傍線部の詞章からはやはり〈放下僧〉のものと見るべきだろう。

「昔のきり」を額面どおり受けとるならば、〈放下僧〉の古態はもっと長く、かつ斬合物でもあったらしい。世阿弥流に「放下僧、古今あり」とでもいうべきで、芸尽しに力を注ぎ、芸能の段を増置させて遊狂性を強めた今の形と、斬合をも見せ〈護法〉型とした古形とがあったわけである。宮増とも近江能ともいわれる本曲の作者や出自をめぐり、次々に新たな問題が生まれてきて、興味は尽きない。